



重見八犬傳

第四輯

卷五



南總里見八犬傳第四輯卷之五

管谷

第三十九面

トモ二箱より歛りて良縁夫妻と葬る
一葉を浮うて壯士両友を送る

文明十年戊戌の夏六月廿二日の朝未明よ大塚犬飼の兩義士ハ、大照文
水と俱よ犬田小文吾を目送りて門の戸やを引闇く舊の席よ團坐す。
まゝ亡骸を隠さんと泣沈もう妙真を脅つたゞも案内すて辛て納戸
より求むる両箇の葛籠よ山林夫婦の骸を精悍しく歛りて表を筵本
包みて船荷のとく造る程よ、大法師と照文入江橋のほうより舟を文五井
舟舡を竊よ背戸川へ漕よ御あけられ人をかしげ又彼孟六齶四郎が
三個の悪棍のせ骸へ信乃と現ハと背戸の河原へ打りて坐り腰よ錘の石を

附く水底あく沈るよ大へこれも回向して頤生菩提と念はれ入み
有繫は不便よおぼえく共よ念佛をうるさくほ程よゑ梓送わき
整ひふ天へ脅暗うりと進退既よ便宜をゆる入江橋の邊よりハ戍兵絶て
耶誘ゆこの際よと其が領き謀合ひ出船の缆とくと急せバ妙真
大八の親兵衛を抱起葛籠よ添わく船よ乗る信乃現ハもうち乗りそ
板子の下よ伏すをり當下延崎照文ハ蓑笠よ姿を窺ひて竊よ船を
漕せば大へむろぬりく妻時河原よ目送るよ迷よ其處とも見えず
方よ是義士節婦を皇天憐みひん靄ひゆく立籠く咫尺の間も
定うやねば彼帆大夫が遠見の兵脅退うてありともひそえれを多め
船路よ障よりななく海上遙よ走る程よ靄收りく日ハ昇りくさればアモ充
照文ハ楫とり迷ふべくもあらず素すり安房人あられ水をゆくと陸より易う

老の身よをとむう。抱ひ揚げ。夢欲現。懐へりとそへ入れて萎る。
乳房を探るも哀れなり。かくとての膚脣は小文吾。大へうもつて立て行徳
あり來よ。妙真をあくられ。おとそと奥へ案内す。信乃現。八照文
ホハ歎びく。對面し。彼條の首尾を答く。文五兵衛が安危を問ふ。小文吾聲を
密しく曩裏か某路を急ぎ。莊官檀内許。赴す。霞深れ。まこと間。諸
折戸をうち。敵ぞく。天塚信乃が首捕く。事れまと報へ。且て召入れ。新巖
帆大夫奥より。かく。がく。吏の趣と向糾す。狐疑の用心。大うかがひ。檀内令が
後を。坐り。夥兵ハ。かく。十手を把り。左右間ち。捕卷す。ものと。某のひきゆ。

豫く仰を稟。ふぞく。僕きみの黄脅宿所。走り還り。くそれば果。と二個の
旅客を。りりと。武士。かく。身の中よ。刀瘡。を。のあつと。聲く。起居。聊不便。あく。
彼と。賜。そ。骨相圖。を。も。被。き。く。れ。彼。竊。す。令。それ。ば。年紀。あ。面景。よ。被
き。衣の色。表。も。の。摸。様。些。し。も。違。を。かれ。が。瞽者。よ。拐。ら。く。の。命。を。伏
よ。い。乍。現。疑。ぬ。く。も。あ。の。信。乃。と。や。ん。よ。極。も。と。と。や。す。れ。ま。氣。か。暗。ひ。そ
酒食。と。薦。り。更。闌。臥。房。よ。潛。す。く。只。下。刀。よ。刺。殺。と。首。捕。て。ゆ。か。交。り。廣。き
僕。が。呻。き。の。裏。見。も。知。ら。ず。天塚信乃。を。の。す。く。親。文五兵衛。が。職。を。與。
や。ね。舍。藏。べ。く。も。あ。だ。ま。を。充。答。よ。胡。論。か。く。へ。夏。よ。熟。ざ。る。老。人の。僻。耳。か。モ。ひ。る。
あれ。此度の恩賞。よ。親の縲絏。を。免。を。ゆ。と。と。も。く。彼。首。級。と。取。ゆ。く。包。や
呂。よ。さ。寄。れ。ば。莊。官。檀。内。受。と。く。実。檢。を。備。へ。る。當。下。新。職。帆。大。夫。ハ
包。ま。衣。と。と。も。か。づ。く。又。も。彼。ぞく。首。級。を。き。く。又。骨。相。圖。よ。合。し。く。も。

ハナ傳玉軒卷一

山書堂藏

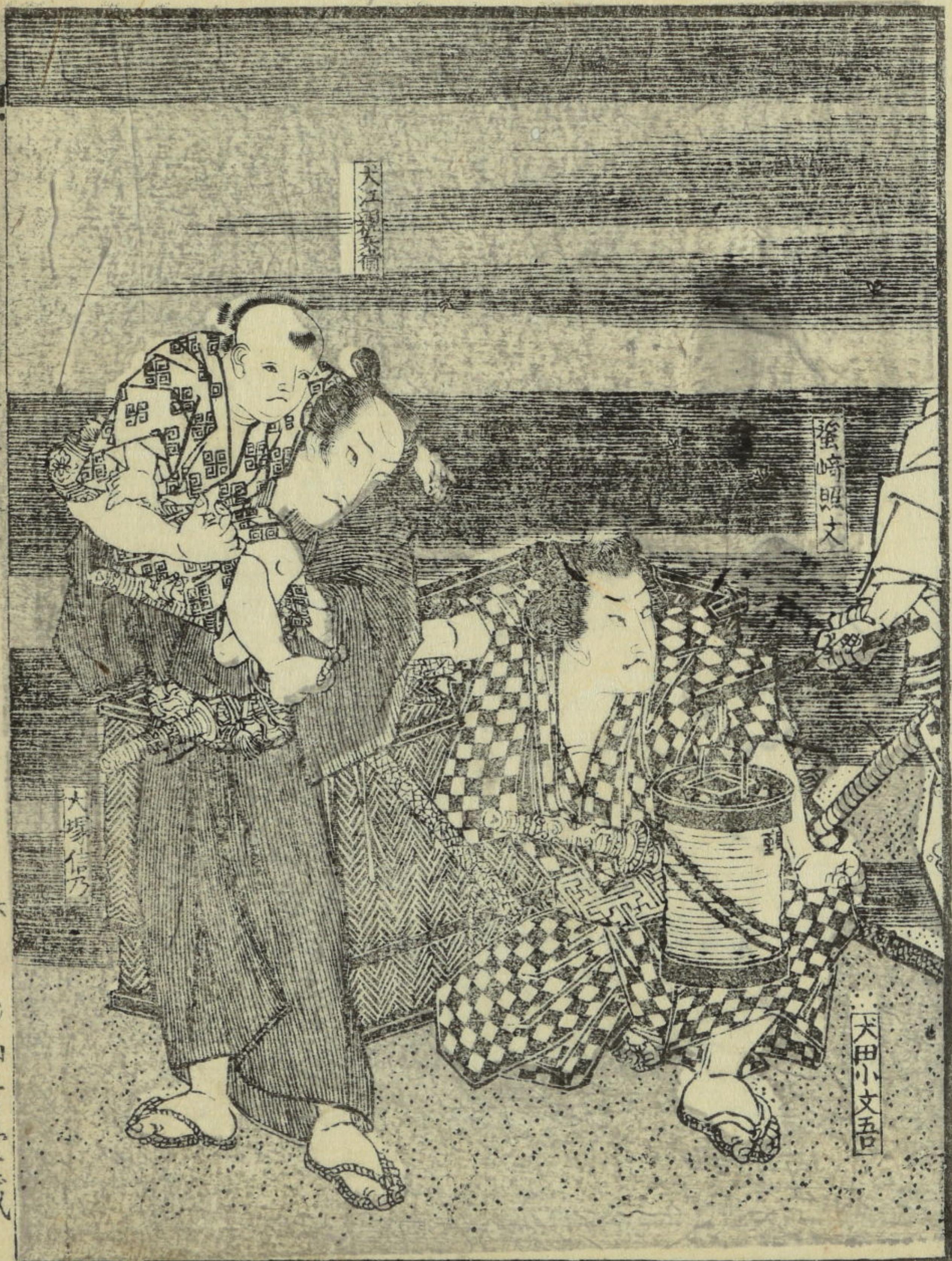
忽地横みと礎と拍々く感をうそと半晌許満面の笑を含みそ某を招へ近づ
小文吾微妙に動たえおへ紛れをもあらぬ信乃が首級を進うる。文五兵衛
科を免へて汝と共に宿所へ還さん。されど亦遅くちきへ速す御戎よかへて。
更の趣をせえあがへ怠慢の罪をめぐで。とく人を走りく戍兵を退せよま
餘のゆりへ云云とうちも案へて擅内よりあらをぬまをかづり程よ靄霽月昇平
う帆大夫ハ促装して首桶を携夥兵をねく遠くから去りぬ。父へ免れを
相伴く入江ト還る。彼權媒をあらわす自身の傳の釋をと歡喜氣色ゆ
かく却す。み良から脣中をと推量れども路次めあれバ告るが由外かく
宿所よからず著ばつ大道徳は迎られ。み子舎よ圓居。身からうの事の趣
きも。義烈沼蘭が狂死及苦血の奇特よありく大塚生の難瘡平愈大八の
房八が。親兵衛が玉のゆ。病のゆ。念玉観得兩修驗の本名本心迷ひか。父は報ぐ。大
親兵衛が玉のゆ。病のゆ。念玉観得兩修驗の本名本心迷ひか。父は報ぐ。大

道徳も人々を船へ乗へ。靄を犯して市川へ遣へ。のぞのゆと告ぬ。父は之
ゆく毎よ下さび。敬鷲が又下さび。詫び。且感し。且歎く。候。袖。堰。腰。膝。
流れゆく水のゆ。ぬきとテ。有繫。老の心弱。今ゆ。役。立。ぐ。し。
かれ。汝ハ道徳。俱して。とく市川へ赴。妙真。よ。力を。勧。ね。房。沼蘭。が
野邊送り。今宵。あらん。葬。のゆ。果か。汝。彼。兩。友。と。潜。や。舟。小
の。ゆ。大塚。を。送。れ。見。も。共。侶。を。そ。ど。婢。児。們。ハ。い。ま。ぐ。夕。く。す。や
彼。お。ハ。こ。ア。來。る。と。も。親。子。齊。一。ゆ。び。苗。守。の。程。を。心。り。と。や。且。懃。よ。彼。極。を
え。バ。又。哀。を。増。ん。の。家。廣。を。擣。を。折。添。く。看。經。と。く。あ。ん。を。老。人。ゆ
相。応。と。く。汝。お。あ。づ。と。閣。だ。く。と。く。と。り。を。ぐ。と。る。親。の。意。よ。住。よ。彼。此。よ
血。お。深。く。物。大。く。ま。洗。ひ。流。く。道。徳。よ。俱。し。く。来。れ。ま。く。の。緊。略。を。報。く
けれ。バ。人々。感。嘆。せ。る。も。恐。く。就。中。信。乃。現。ハ。文。五。兵。衛。が。無。異。と。祝。て。小。文。吾。を

ハ大傳玉軒卷一

勞かとの大ききゆく歎言葉の末やも。角山林夫婦が死を惜むそうぞ深かりる。
且して妙真は縁うひを小膝を進め、嘯犬田ぬ。かくらひ子の志竟よ空アリ。
かくらひく輒く追捕の人々を欺だめれば亡魂のまご歎くらひゆんと。高工
ウモミカ在らば。現大人のいれどく葬のまゝ今宵ナシハゆく影護カミガシヘ。と
又バ小文吾点頭。己もさを知ふ。却れ犬塚生の急難の一具ハ釋れ松マツ。あす
辭我へ遠くもあり。徐バ房ハ沼蘭が死マサニ。且く人よく死マサニ。四鄰の入り
向バ沼蘭ハ聊故あく行徳へ遣マサニ。房ハ所要あく鎌倉へ赴マサニ。と
答かんとあくわ月も絶よなくう。この宵闇が究竟か。亥中の頃は如此アリ。と
の命令。時刺マサニを。ハ大法師ハ七骸と歛や葛籠のやうよ退りて潛マサニ。あ
キを向マサニ。枕忿仏も夢の世や彼邯鄲のあわれは。母マタニ鳥マタニ焚マタニ。出立の
火マタニ。飯を送縁の涙を鍋マタニ落マタニ。味噌妹マタニ。伏え花開マタニ。縁マタニ薄マタニ。實マタニ汁マタニ。を

更阿弥陀佛称陀仏々々と念マタニ。巴も初夜過ぎく寺の鐘も無常善
事。流轉の巷煩惱の狗の声より更もく生死の海近れ。彼岸より波の音
轟くハ返近呼吸の徂徠の人の迹绝く既よ時刺マサニ。ハゆく。身もく支度を
済よ房ハ沼蘭が七骸を歛マサニ。兩箇の葛籠、小文吾と現へと背は負ひて。既被
斂を携マサニ。大ハの親兵衛ハ。の時よも熟睡せ。と信乃が横マサニ。杠地マサニ。墓所
裏供よ立マサニ。照文ハ豫て準備せ。罩張燈を引提マサニ。先よ進マサニ。大八則導師マサニ。
兩箇の葛籠の間よ立け。既マサニ。背門口より送り。即ち要時マサニ。と苗マサニ。難マサニ。妙真ハ
珠教よ唱名の声マサニ。曇マサニ宵闇の天班難マサニ。星影も定め。死世の哀別離苦堪マサニ。
炎暑の六月も今宵マサニハ肌寒マサニ。風ハ本来空水火滅マサニ。と。又光に垂マサニ。欲
とぞらふ張燈のえを。あらゑを翫マサニ。伸あぐく目送り。ころ程よ人々を。



大傳二輯卷一

山青堂藏

阡陌を邁くと百歩許西へ入ると一町あり険小なり岡あつけ此の處へ昔より大江屋の墓所あり小文吾のよく知れど云々といひて心く葛籠を卸すをかん現へりやをも却て葛籠の上に附さうし。鑿を兩人よりまかばく房へが親眞兵衛が墓の側ある壙を掘起まで七八尺をぬぐも穿果より當下信乃ハ稚見を石の上に居措き両箇の葛籠を擣よびバ小文吾現ハ諸事をなげく空よ縄をもつ。夫婦を合葬ほ程より大法師ハ空のほう近く合掌して引導の語句を唱てゆく。諦聽諦聽四大本來空矣分別泡沫與夢幻妻子猶渡器况珍寶乎疇能隨汝者儻不破壞一團心識亦焉知寂滅之為至樂頌曰荷葉與花共浸影漸瀝涼風蕭颯急催秋其氣清列其色慘淡涅槃室中物僉休息吁得時哉吁得時哉即投與以下火最後之句子作麼生看

破熱池中並頭蓮分明紅爐上一點雪喝
唱了て退くと小文吾と現八ハ再び鑿をどう揚ぐ立地より埋ゆられば信乃ハ
之大起立右をも來く推す。左右より梅の核を伏せく阿伽を沃ぎ莽草を
挿ミ大八の親兵衛を第一番より推向て頭より額つて次より小文吾次
信乃次より照文次第より焼香面向せりこの時より稚児ハ全く睡の覚よ
けんと訝しげよ左見右も細小かるもどうも合して廻らぬ舌より念佛の南無と
をもよお寺院賴む人よりの所作ぞ痛すれをも彼をもよ人より嘆息せり
中。叔あがはるよおそれバ又稚児を携く金大江屋へ來つ背門より入る。と序
程より後方遙よ撞聲。鯨音ハ四更より妙真をよく出迎へて人々を芳ひ。盆より
茶碗を並居て準備の煎茶を薦め。小文吾ハ墓所のより埋葬の為体を云々^と
云々。妙真これぞうわ愛ううが手ハまく。媳婦さまよ彼懶よなり。義の為よ。

其の命を隕^{くわ}せば。世の雑傑達^{ぞう}が極^きを送^{くわ}るや。仰^あんや。况^あ祖父^{じゆ}松平の主^{めい}。師^しかうと^う笑^うをも。金碗^{きんわん}大入^{だいにゅう}の子^こは、あれ^は良^い道^{みち}徳^{とく}。引導^{ひど}せられ^はハ五山の衆^{しゆ}徒^徒を全^{ぜん}聚^{まつ}して經^き済^すせす。も^も爾^そ優^{すぐ}べく千萬人の道俗^{どうそく}。棺^棺の繩^{いのし}を曳^ひき^てあり。渠^きホ^ホが爲^{ため}。面目^{おもて}。亦只^{ただ}これらの手^てをも。尚^い少^{すこ}く孤^こす孫^{まご}をも。捨^すられ^ば何^か歎^あき仰^あんや。とつひても又^{また}歎^あく袖^{そで}は黄^き緑^{りょく}の稚兒^{しづる}をも。臥房^よ伴^はへ^ハ萌^{めい}葱^ねの帳^{ひろ}の七布八布^{しふく}。廣^{ひろ}が今ハ化野の中^のを捨^すて^ま。椅子^{いす}と^と。やがて^ねゆく。夜^よも哀^{かな}れ^てかく^そ。又妙真^{めうしん}ハ舊^きの處^しよ^り。此^こは放^{はな}遣^{はな}火燒^{ひやき}。官待^{かんてい}バ小文吾^{こぶんご}これと見えり。大家^{おお}家^けよ甲夜^{こうや}も^もり^り。ど^う。あ^り。許^き我^わへ遠^{とお}くもあ^り。斯^{この}も^も榆^ゆを坐^すん^だ。危^き一某^{まい}ハ曉^あけ^て犬塚^{いぬづか}犬飼^{いぬかい}兩友^{りゆうゆう}と^と。船^{ふね}を大塚^{おおつか}へ送^{おくり}。この夕^{ゆふ}が父^{ちち}も豫^よくあ^り。をぬ^さく。あ^やも商量^{りょうりょう}決着^{けつ}をも。心急^{きんじき}がのせ^ま。と^うは妙真^{めうしん}を寄^よそ^そハ名残^{なごり}をも。惜^くれ^て切^きく初七日^{はつしち}の夜^よをも。苗^{なわ}原^{はら}へ^へと^と。筋^{すじ}を^くれ^ば走^はむ^か。さばき夜^よの^よ深^{ふか}處^{ところ}を明^あ果^はる^るを^と。幾^{いく}度^{たび}相^あ譚^{はな}。更^{さら}と^う慰^{なぐ}れ^ば信^{のぶ}乃^おハ現^{あらわ}ハ共^{とも}侶^{たま}は妙真^{めうしん}より^う對^ひく。此度^{このたび}某^{まい}小^{ちい}や^うすく^く。今^{いま}息^{そ^そ}賢^{けん}母^のは熏^{かく}ら恩^{おん}義^ぎ。今^{いま}そ^そて演^{えん}盡^{ぜん}表^{あらわ}し^て。而^は後^{あと}難^{ひじり}を憚^のり^く本^{ほん}意^いを故^{ゆゑ}郷^ごへ赴^はけ^ども^あれ^ど故^{ゆゑ}有^る伯母^{はく}夫^お許^き再^び此^この身^みを寓^す難^{ひじり}只^{ただ}同盟^{めいりゆう}の一犬土^{いぬぢ}大川^{おおかわ}莊助^{しょうすけ}一字^{いっし}を額^{こぶ}藏^{くわ}と呼^よみ^る。よ^く潛^かや^う對^ひ面^{おもて}と^と。ひ^いぐ^い入^い人の^{ひと}を告^く。ひ^いぐ^い餘^の所^よ要^うも果^たし^む。と^うか^く外^{ほか}亦^よ他^{ほか}も^あ。所^よ不^ふ定^{てい}の身^みへ^い一旦^い袂^{たたき}を分^わつ[。]あ^やも^あ実^{じつ}生^うの^の犬^{いぬ}田^た父^ち子^しあ^り。づれ^はは疎^疎遠^{とお}ま^くもあ^り。嫡^{めい}孫^{まご}の為^め自^ら愛^いし^いと^う哀戚^{あいさい}を^う傷^{いた}られ^ひ。か^れば^一所^よ不^ふ定^{てい}の身^みへ^い一旦^い袂^{たたき}を分^わつ[。]と^う告^く別^{はな}よ妙真^{めうしん}ハ心^{こころ}没^{ぼつ}す[。]よ^く應^う再^び會^あの時^{とき}を^と心^{こころ}緒^{はじ}を^と盡^{ぜん}せ^ばれ[。]懷^{いだ}う^う准^{じゆ}備^びの沙^さ金^{きん}を^を五^ご包^{ぱう}と^う。先^さ三^{さん}包^{ぱう}を^を扇^あふ來^{くわ}す。そ^とが^と信^{のぶ}乃^おハ現^{あらわ}ハ小^{ちい}文^{ぶん}吾^ご。か^くは^く近^{ちか}く^く寄^よる[。]三^{さん}士^しの金^{きん}ハ三^{さん}両^{りょう}を^を下^げ包^{ぱう}と^う。お^もう^おざ^ざも^も些^{すこ}少^{すくな}い[。]此^こ度^{たび}の路費^{ろひ}を^を資^ある[。]そ^とが^と私^{わたし}の^の餓^{うな}別^{はな}。里^{さと}見^み殿^{どの}の賜^{たま}を^を辭^さを^を納^なむ[。]

いふ三人ハそれをばあべ。そひ多ひうけ取る。某ホハ過世あり。既同盟の事。全くくわば
徴ニ志ちゆきをゆる。今又何ホの功あり。この賜を受あらん。且大塚へ道の程
十里。足らぬ旅か。殿の纏腰ハ要すと推辞。照文頭をうち掉り。あう。いつま
本意よ違へ。同盟の義よとく。且く徴ニ志せし。もとの因と果と推せ。各位ハ代姫
うみの御子ゆゑのあは。ひぞうとの功あは。俟く賞を行ひ。の唐かんや。豊嶋の
大塚ハ宮戸の大河を開るのときの道の程遠。さうとも大塚生ハ伯母夫の宿所。かう
いふ。ひどき。が纏腰。そ専要か。某も亦旅か。あれハ囊中。貯祿の多き。もと
憾るのも。りきどりの物受ら。と。ハ安房。還り。くしが君。報する辭も。かう。い
ひき。ひき。やま。おのげ。まこと。ごら。と。うえ。いき。ひき。ひき。ひき。
納めあひ。と。頗る勧め。己ざれ。信乃現。小文吾。おほきの理り。感服。三人
脊一恩を謝。くやしく。よ受納め。と。照文。又下包の沙金と扇。ようわ。来。妙真を
招き。近づけ。老母。おふ房。夫婦。追薦の香華の料。お子親兵衛。賜。うみのく
ま。ち。う。おふ。まち。よ。こ。あ。べ。ふ。く。ま。

八大傳王轉卷一

内りどうち乗とく棹とりのゞく推妙をもや黎明の潮合よ漕れくくゆく船の
迹あたゞく世の中よ別とりバ牝鹿の角の東の間もかく惜そ晚に父のさう
きり却説この日亭午の比よ文五兵衛ハ行徳より来ゆき妙真をもくれとて
あをあくと來す。つまわゆくえと真成よ上座よもあら送よ波吐を要時
あきとえ。そ。
何すもひしゆをあるトハモグ依背向よかく頗りよ涕をうわめバ客も御
り腰の扇を。枝ギー推りよかく胸のあらをあがく。もぞく目を紛せ
ども紛れぬよりハ愛憎の歎きの霧の蘿離やむ憂を隠すよ度どもかく
聚えしけん文五兵衛ハ畳む扇を側よ措く。嘯阿懐。お向上よ房八が
孝なり義あり潔也今般よ送言曲よ笑う。さをうよ義を竭さざとも
世を隔て怨を執念深今さうよ何とくべきか。あらうハつゆをもく
うやうやかく懸るよあんと。やれ人の一薦やうめ沼蘭が美分

八大傳玉轉卷

卷之三

人受け胸の疼痛を訴え、諄々と口をもよおした。小文君は彼両友を送り、江戸へ赴たる。又二そもの賓客達は奥をもよおす子舎を抜きと向へば妙真渡を收めて宣ひ、子供の如く子どもの如く、ひどい絶間あたみと又口挽立く泣を冥土の碍りとあらん。犬田とのハ今朝未明より船を彼六度と大塚までまく遅くとあれ四五日也。還えといれす。かれが後安うべし。大道德と蟻崎、子舎よ工をとひまわし、誘あへどひすく身を起さんとほほ程は大八の親兵衛外面より走りあく祖母あるや。物と携ふを躊躇く推進をく。大慢く行徳あり外祖あるの事事す。礼あゆひをと額つまうと文五兵衛はもづよもを膝ようち衆多く大八は和郎ハまく要時又ぬ間ひととまう大人あらかうやう物取えと機探りを。花葉田舗糕を袋の役よ遞与せ受く戴だる怜俐ひど抱だ焉。あらかじめを。も事。そしておもひ。ひそきぬる事あり。締く頬を令つ頭を拊つ愛やうと忽地よおひ顎えりと拭くと單衣の腋用す。眼鏡と取まつてくと、もとあく感と已焉だ現玉とひ癪とひ笑にすと灼然と既よかう奇特あれ。孫ゲ久後ひく遷し、勢失ひもとひのひ玉と護身囊よ。既よかう腰よ著そくをかくと文五兵衛ハ妙真を先よ立く子舎よ赴たる。大病ゆき腰よ著そくをかくと文五兵衛ハ妙真を先よ立く子舎よ赴たる。大敗文よ對面しと述す意を演情を税く。閑談をく爾々やうり、大ハ昨夕三犬士と鷦鷯よ山林夫婦が柩を岡よ送り、埋葬し為体及犬田、大江の舅甥。大塚犬飼ふよ寺しく里見家よ過せ。緒の趣をと見示せ。照文も亦來意を告く。賢を招た士を徵す。君命を述びて又り。されば此度某ハ四大を相伴く安房へ還らんとあひ。又は彼犬川莊助とあは。大士今朝武藏の大塚を相続金を贈る。大塚犬飼犬田木ハ且く徵す。応せ。しむ里見殿の家臣を免

八大傳玉華卷

。あらわし。うわづ。○それきりやくくか。
ひがうへのまももひとまえ。○ちとてと
日手を経む後七歳未滿ども些の慎かんに初七日を迎る比あハ小文吾もむす草をん
あきうれ。○もひもひ。○お首つづら。やさえ。○すで
又これ彼と商量しき。先首よ從ふされ大塚生の厄難の既かく釋ふれ世を
をうきえ。
憚の閑を知。あよのまゆまんす。又行徳へ來ゆまぬ素人宿ハ町寧やねども心死
もどる。○まくともう。
かたすりどあん客店の垂造作事。分れあると二つの隨意逗留もあひねと他にも
ひとまとひゆきとあると。○うき。
せきつ文の城よ。大照文ハ歎びく送ふかく慰めき。かくとこの日文五兵衛ハ照文を
とまつ。○ききとく。
相伴く行徳へたり去り。れより。大と照文と或ハ一ト日或二日送代は市川とれ徳不
宿。○やど。○まきもぬ。○まき。
宿。○四五日を送る程よ房ハ紹蔭が初首よかりぬ。あいれども小文吾ハ大塚より
まぐそ。○ざんごぶ。あき。き。○ひもつせん。ももえ。こもく。○ちやい。いは
文五兵衛ハ朝より事く竊よ追薦の法筵を賛れば。大ハ逮夜より続
き。○もひう。あらやう。とひり。○
錆。○照文も正首よ俱よ席よつてすくまの跡を吊ひ。○とくには程よ秋の
風。○あら。あを。あを。○ひき。○あき
風を立く外の夏越の幣。○もひ流れ河岸よ。○あき
風を立く外の夏越の幣。○もひ流れ河岸よ。○あき

ハ 大傳王轉 卷一

青堂藏

文五兵衛も妙真もちく心もかゝると、大照文はこ相撲うり時よ七月端の三日、大ききのゆすり行徳みあり。朝とく起て文五兵衛より草うれづしと思惟うよ犬田がひま
かくもあは必改めうとや。信乃ハ定ま告ひどもの伯母も伯母夫も甥をせりんと
謀らむハ被村兩の刀を奪ひく、賺して僻我へ遣ゑるもあだ。あれらの嫌疑あればそ。
信乃ハ故郷へ赴たるも伯母夫許身を寓さし云云といふとの親族も懇いぬ彼等
亦犬塚が久恋の地もあだ。只との友と貞實も婦もびざう人のえを報をとめり
のまかんよ送りめれや。小文吾もうけふ事もかくぬ、其處も不側のすすめを抱を
みんすり食道彼地よ赴く。や犬塚大飼小が旅宿を何處とあがとも大塚の莊官
墓六が小廻から額藏の莊助を寵を訪へ立地よの消息をひつて是。從それのあ
くとも房ハ夫婦の初七を果さば大塚よ赴たる彼大川莊助も潛やうよ對面しま
年來の行脚の趣意を告ぐ里見殿の家臣うぐ死契約をせんとや。今す
邁々ハ翌の夜ハ小文吾せねく必へん頭を病むとく。とくよ文五兵衛致ひく且く
刑徒ほほ程よ折らず市川より蟹崎照文來よれ、船で前室よ迎入れて、大法師共僧小
糸も房も夫婦の初七を果さば大塚よ赴たる彼大川莊助も潛やうよ對面しま
年來の行脚の趣意を告ぐ里見殿の家臣うぐ死契約をせんとや。今す
らもそうかくあるだ。ありて安房へ俱ゑべずを折く妙真もお勧や。渠もや
や秉引く物も小文吾ひまくね。この一條を事整ひ。まるを法師ハ秋暑
厭ひく彼地へ邁んとつらよ日ひの鬱胸を引く足れり教べりくと只嘗
稱賛あらうかく文五兵衛ハ外よかく便船を求ふ。跡の比出船ありあり
大照文も酒食を羞りく歎待を程よをめの時刻よあり。大ハ行裝を
整く遽くあむか。文五兵衛も照文も後よ跟を先よ立て入江の船場よ送りく。
まの波もかくる日を翌と契りく袂をうちぬか。大照文もよのタの趣を

大傳王轉卷

妙真よ報んとえ文五兵衛よ辭一別れく亦市川へ還り。嗚呼廻舎の不定あり。
緯逆期もぐくべ。值遇も時あり。別離も時あり。あひて、別とえれ、遭ふ現風雲の
たゞまひ親串眷愛前諾後信料りくひ世間よゑく離合と聚散あり。

第四十面
密葬を詰く暴雨風妙真を挑む
うんむ まこと あんれいをひようそく
雲霧也已てく申雪、己の不奪か

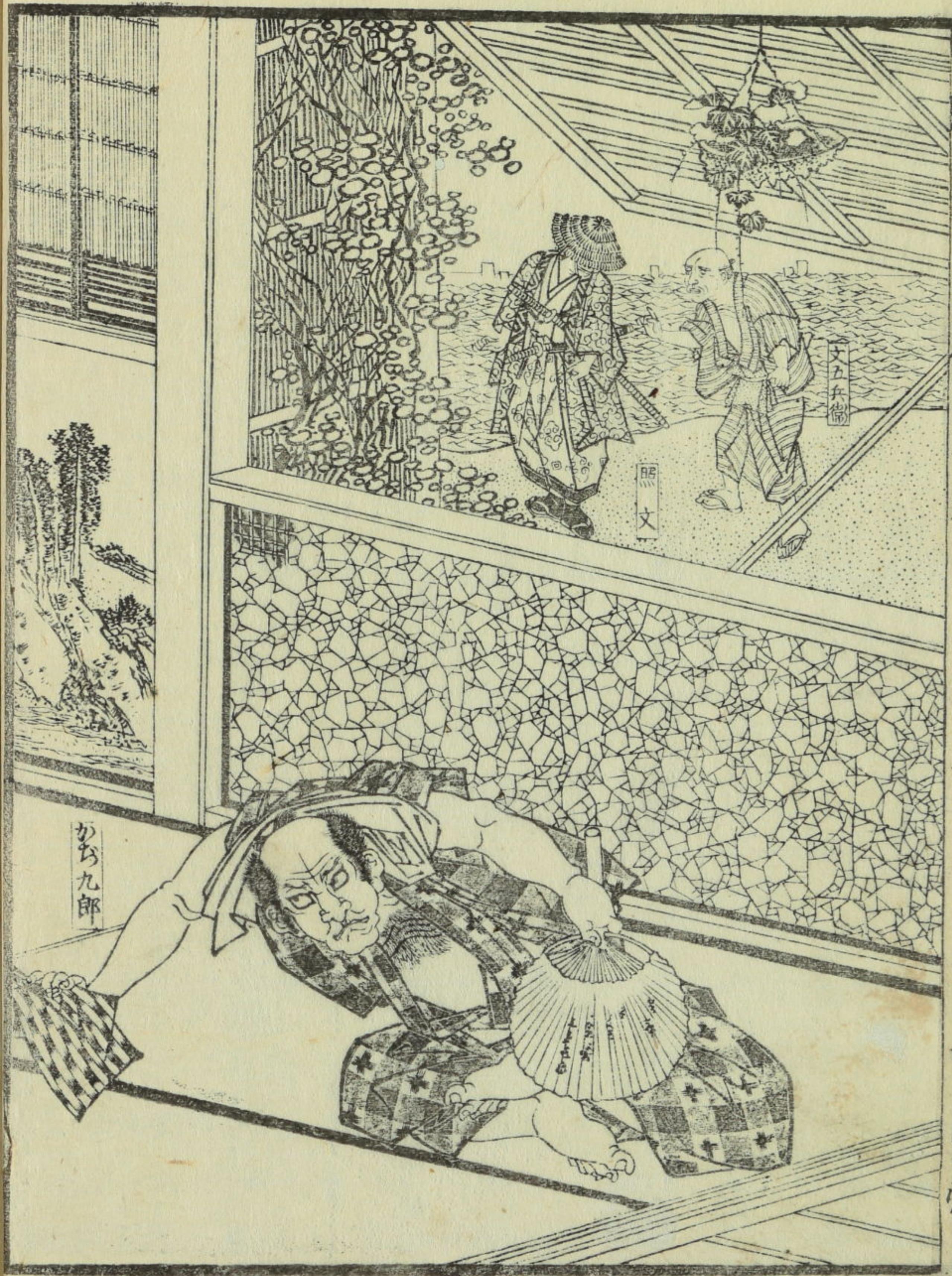
嘆息して現宣ひびき胸中ひまねりよけり小文吾とてり言を食むるふあらぬよ
道徳をも何くもみまへとせんとゆかのまを休むなし然とてちかく迹を追ひて彼地禁
赴たゆかども引出られなく速よれりせゆてとがひハ是處と行徳よ俟め、初不拘ひとせ
増んのましき古那屋もあく便の有無を問セりけりかほどり豊秋翌去日ハ両人よ
一人信のかれとハ祐トと慰められ照文ハ寔よ然やうと應つ脉く行徳へ赴たす。
かを一程よ妙真ハむとく悔きも歎く日教ハをくやずあくけハうふ子と云ふ總の
二七日よ當より今朝ハ生平より多きの繁るよ霎時珠數把る暇あくまちや
正午よかりやうり大ハグ昼寐せし間よ香盛添んと家庵かる定香盤を却へとまえく。
かき坦へ又櫻かくは灰ハ涙よ濕れども立ともあれ夢の迹煙とかり人との事ひと
きも。○そろゆきみどりんごとく。○そくさかこ。せんくふ。うつ
膽むか心の闇を弥陀本願照させりと燈明を卒と櫻起へと綠香よ移へく
う毛香柳ハ四條五條一下もよ正念唱名應頂礼般依佛般依法看經よ外へ憚る

ハ 大傳工車 卷一

けぐ訪人翼六邁んとらひのへよすけバ哥々ハ鎌倉へ赴く。月より今還だ。
娘御ハ里へ返され。といひてゆく解ぬる故あらば。てきのひとせき
頭痛は患む事。ともながる案ほとば仄よ笑ふとある。又不全ヤ。地もあつ是う
勘定附く。それバ。あやハ近属法師と武士と或ハ下宿或ハ二宿送代す。逗留セラ。それで
やゆく云云と疾視。眼ハ違ざれど人の譲訴をまぐらべ。かる時モ馴染甲斐
あれ。同状ゆく阿懐の返答。すこかすも御ん仇すかんと。不程よみハ闇宅の
蒿工們も。舟を就くみか在ら。彼客も坐くやう。と定め告う。あり。バ
氣の毒が。推掛相談人。すまう。背向す。見隣。故り來歴序聞る
まづ。かの如。後段ハ。ちく長き。間違。寄り。く坐り。問。ば。す。もあう。の。と
あく。と。狎。く。席。薦。敵。ぢ。招。く。言葉。の。端。も。伎。倆。あ。く。と。猜。う。妙。真。六
も。騒。ぐ。匈。月。を。鎮。り。坐。ハ。ゆ。油。断。葉。そ。かく。心。つ。れ。う。志。ハ。大。き。事。で。欲。う
候。ひ。筋。か。ん。や。房。ハ。が。鎌。倉。へ。赴。か。ハ。父。み。か。賣。り。沼。蒲。と。行。徳。へ
遣。せ。ハ。初。媒。介。せ。れ。人。の。去。歳。の。秋。身。あ。く。よ。今。旅。又。き。の。後。家。と。く。長。病。
著。す。臥。く。と。告。られ。と。ば。も。も。措。れ。ぞ。と。看。と。く。と。あ。よ。と。彼。外。へ。と。遣。く。れ。
又。彼。両。個。の。旅。人。ハ。原。ハ。古。那。屋。の。客。が。れ。ど。又。房。ハ。や。も。疎。く。終。バ。渠。が。還。る。と。待。び。
素。く。き。へ。も。來。か。り。道。遠。急。日。の。暮。て。か。ま。よ。運。き。打。ハ。宿。ち。ま。め。か。く。と。ぞ
や。ハ。と。の。せ。も。果。ば。膝。突。説。く。否。宣。か。愚。一。か。の。絶。情。由。ハ。大。抵。猜。く。う。お。か。う。と。
そ。老。覗。き。る。檜。垣。の。嫗。が。紹。や。あ。だ。齡。ハ。四。十。あ。り。と。い。ど。根。が。き。の。縲。致。の。捷。
も。て。や。多。脂。も。脱。び。み。ぐ。ト。冬。米。の。仙。人。は。廻。窺。く。と。雲。の。歩。板。を。踏。付。く。勿。地。
落。ん。女。房。盛。り。そ。う。そ。や。年。未。寡。居。の。枕。寂。く。不。圖。せ。す。や。あ。う。心。と。も。く。惑。ひ。添。く。
何。が。寺。の。色。界。和。尚。或。ハ。連。歌。み。香。立。花。と。蹟。美。妻。み。趣。あ。銳。又。武。士。の。浮。浪。人。傾。
二。個。も。密。夫。の。か。と。の。を。だ。燈。松。あ。り。色。よ。惑。へ。バ。子。で。も。不。昔。物。語。も。あ。あ。と。不。便。

哥々ハ殺され。次第一番ニ疑はれ。あらの墓所。岡山。新物を瘞。跡。わられ。
どもあふ。犬猫でも死。うとい。す。只房ハ鎌倉へ。只房ハ鎌倉へ。只房ハ鎌倉へ。
肩遠がれ。日毎。行徳へ。死かず。古那屋。又媒人の宿所。娘。居。居。
えと。お。如彼岡の新葬ハ。哥々夫婦。よ。度。人。隠。埋。身。真。譯。
かく。だ。あ。まの。を。怪。ひき。人の。尊。す。に。古那屋。大塚。う。ふ。
罪人。宿。科。あり。あ。ト。文五。衆衛。捕。られ。子。小文。吾。勧。登。彼。
大塚。首。捕。討。我の。使。進。う。親。免。され。う。の。日。う。く。小文。吾。
お。地。あれ。ん。家。よ。く。び。又。吾。併。豫。跡。ぬ。鹽濱の。鹹四郎。孟六。均太。の。二人。
え。の。比。う。と。往。方。斬。せ。と。ふ。ひ。く。疑。そ。かれ。巴岡。埋。や。ハ。彼。大塚。と。腰。歟。
ま。度。あ。の。山林。と。大田。が。竊。謀。合。く。鹹四郎。水。殺。し。る。そ。亡。骸。埋。め。
も。有。繫。後。手。く。ね。バ。且。影。隠。セ。次。送。も。勘。説。る。こ。よ。む。ハ。

違。大。う。ば。を。衆。入。欺。く。と。蛇。道。を。蝮。ハ。あ。れ。そ。う。吾。併。欺。れ。ゆ。明。之。地。
う。わ。が。一。史。彼。新。葬。ハ。何。人。を。詰。問。れ。て。妙。真。ハ。何。と。若。峯。よ。集。る。驚。よ。身。を。直。
せ。く。免。あ。苦。一。穴。胷。の。彼。風。を。再。そ。び。鎮。ち。氣。色。よ。え。を。ど。微笑。え。ぞ。笑。う。け。
窮。邪。精。う。れ。九。生。と。活。る。物。子。を。慈。み。ハ。か。を。と。よ。譬。バ。色。よ。惑。ゆ。も。う。惡。人。今。此。
よ。の。ま。世。ふ。又。あ。ぐ。ふ。ひ。だ。一。箇。も。當。ら。寂。す。か。く。疑。れ。ハ。か。く。よ。ま。み。ハ。隱。そ。く。も。
侍。ば。彼。大。塚。信。乃。と。ゆ。ん。己。と。を。ゆ。ぞ。阿。沼。蘭。が。兄。の。敵。捕。モ。ハ。親。の。ゐ。小。
と。素。う。怨。あ。あ。ゆ。く。ば。切。く。そ。の。七。骸。を。葬。ら。ん。と。そ。ど。行。徳。ハ。肩。憚。あり。
お。か。の。墓。所。へ。と。い。ま。と。推。辭。れ。ぞ。と。く。房。ハ。の。意。よ。任。し。う。れ。も。絶。て。え。
あ。ぬ。罪。人。の。軀。と。埋。め。そ。と。く。房。ハ。の。意。よ。任。し。う。れ。も。絶。て。え。
て。く。ち。お。あ。東。と。柏。く。俯。つ。仰。が。う。笑。ひ。あ。う。只。せ。ん。と。お。い。く。信。乃。を。も。數。ふ。か。れ。ば。向。か。ハ。
お。落。で。語。ち。よ。落。る。あ。く。あ。く。も。ス。ま。り。犬。田。が。仏。あ。ろ。あ。う。す。や。彼。あ。く。七。骸。と。理。と。



卷二

○すゞやひくもあひ。○うみやくゆくもこひあま。○うけ。○ふんと
欲せるとも既よハ檻の相撲より恨を含む妹夫よ頼しセド諾ひせド件の事れ
えれ。○みあえ
縫う。六月廿二日。寝昏琴崎山と山林が犬田と出會の門擇ハ誰ともあらぬものも。○
余を云云といふハ言の後先取次かうの偽りあがたの。さればうそ猜はふ小文書
ああき。○こう。ちくさん
あの哥タを殺して逐電せりかどーがくそもの親文吾兵衛よ竊よ金と和解せり。○
ちやざじごべふ。○ひもく。よ
身ハコ子の亡骸と阿容とく入もあせば葬とあをあんぞんしが娘と女
。○えか。ふうち。○見え。ざい。○と。うひ見えあく。○あい
も女あはれ朝日す月支入大のみをう夫とどう替引替飽あぐる藥をせうるよ人目
ねがえま。○てくハ。○ろく
むらきの念佛三昧との神ハ喫ぬ論す。○め。○め。○もあが。○
をすをあらひとある。○あまち
裳を楚と引申く且俟之ひをあす。彼新塚ハ誰かともその職役よわびて墓
。○あひつ。○れ
所を幾うバ不法かんきの矛よ預きと仰ぬ。○すと。○おき
葬。○まひ。ヤ
睁く縫の役ゆびとも正しく認し不敵の悪すと莊官殿よ術と賞禄よ草ひ。酒も
ぬ飲む。宝の山へ入りかづきと空と帰らんや送よ詮る歎偽。○下跨。○また
。○ま。○

八、大傳王軒卷三

卷之三

八大傳玉轉卷

卷之三

八犬傳 玉輶 卷一

一
山書堂藏

及び犬田父子も大江の老母よりかゝり脱ふ。やもくも船丸郎を走り、たゞ一
袖断ハ大敵悔^{ふき}ひをとあそひて後れにうとも追裏^{おひ}に轟^と果^たし外^{ほか}は術^{じゆ}かへる。
ひひきく刀を取^く手^てとひを文五兵衛推禁め宣^く理^り遣恨^{けんこん}、誰^もも
れども今や追^かふをなほぐ^か。且^{よし}船丸郎ハこの里^{すみ}定^{さだ}やち宿所^{しゆじょ}かへ只^{ただ}同惡相
聚^{つむ}。無賴賭博^{ばくはく}の友^{とも}を羨^{うら}ぎ^{うら}む。愚按^{よし}よしと^{よし}は千尋^{せん}の堤^づの水^{みず}一^い切^きの壞^ぬ
を壊^こす。懃^せよ今追^かふ毛^けを吹^ふと^と疵^{きず}と求^うる再度^{だい}の後悔^{ごくわい}あつりやせん。
這奴^{やつ}ハ這奴^{やつ}が隨^{まわ}ふもあく未然^{みぜん}の禍^{わざ}を避^さる術^{じゆ}とあくまでもそれ早^{はや}くハ要^う事^{こと}す。
やもくと練^{ねり}くねく照文^{てうぶん}ハ僅^{すこ}よ怒^{いの}を歛^うき^う。早^{はや}く^{はや}ゲんごく^くふ。ももえん
喃^な阿^あ懐^{いのち}を引^ひハ何^なと云^ひひをど小文吾^{こぶんご}武藏^{ぶざ}へ赴^つか^う。既^す十日^じもあんじ^じも渠^わ
きうかう道^{みち}徳^{とく}三日^{みつ}四日^よ歷^へても遙^{とほ}りかのぞく蟹崎^{かに}の坊^{ぼう}をとも相^あ譚^{だん}くも
あくよ慰^{なぐさ}むよ^く居^ゐつゆを^く市川^{いちかわ}へ赴^つかう又妙^{めう}真^まと商量^{りょうりょう}を秀^{ひで}也[。]
立^たく途^とを^く歩^{ある}く事^{こと}を^く見^みひ^う又^{また}は^は不^ふ可^かを^う掲^{かか}く胸^{むね}に^は不^ふ慮^りの^う
の^うを^うあ^たた^かう。も^うは^はあ^たく脱^ぬふと向^{むか}ハ妙^{めう}真^ま嘆^{たん}息^そと善^よ美^み善^よの報^ひい^う道理^ぢハ
豫^よう^きう^きあ^がう義^ぎも節^{せつ}婦^ふも^あれ後^{うしろ}を^う枉^{まが}津^つ日^ひの^ひ脣^{くち}演^{えん}縁^{えん}幸^{こう}かた^う幸^{こう}窮^{きゆう}。
過^{くわ}世^せの業^{わざ}報^{くわ}りん^くも形^{かたち}に^は身^みの形^{かたち}覗^{うかが}世^せの^うあ^まく遁^{とお}ぎ^う。や吾^{われ}併^{あわ}ハ延^のられ^く。
無^む失^{しつ}の罪^{ざい}よ沈^{ふか}むと^う稚^{わい}た孫^{まご}が^は慈^じう^く人^{ひと}と^うね^うば年^{とし}來^くの甲斐^{かい}あん^く。
孝^{たか}子^こハ^まう^く行^はく^く浅^{あさ}き^き行^はく^くか^かう^うと^とか^かう^うと^とか^かう^う先^{さき}う^うの^のハ^は族^{ぞく}よ^う。
王^{おう}と^とひひ^くく^く又^{また}う^う歎^{かく}と^と照^{てう}文^{ぶん}練^{ねり}り獎^{たん}ト^と禍^{わざ}既^す蒲^か檻^{はな}より起^{おき}と^と知^し^く禱^{とう}を^う。
長^{なが}食^く淺^{あさ}ハ无^む益^{えき}て^かれ^ば大^おと^う小^こ文^{ぶん}吾^ごを^あよ^う俟^まん^く甚^{せん}危^き一^い某^{めい}ハ大^おハの親^{しん}兵^{ひやく}衛^えを
携^なく速^{はや}く安^{やす}房^{ふく}へ還^かえ祖母^{そぼ}も孫^{まご}も傳^つ添^そく且^{よし}この地^じを遠^{とほ}離^{はな}り^ば彼^{かれ}船^{ふな}丸^{まる}郎^{ろう}が
毒^{どく}氣^きを避^さふ。これ究竟^{きゆう}の便^{びん}点^{てん}か^かく^くとく^くこの處^しを^たり^たり^た封^{ふう}疆^{きょう}を^と退^しバ惡黨^{おのとう}
あれ。莊^{じやう}宮^{ぐう}あれ數^{かず}百^{ひゃく}人^{ひと}ひく追^お蒐^{めう}來^くと^うも怕^ひふ^ふ死^しう^うあ^あだ古^こ那^な屋^やの妻^めハ宿所^{しゆじょ}よ

かく今宵の出船に乗まつて巴摺へ早且く大塚へ到らんと易うべ。この條の
趣と大と異ま報知と爲又進退便宜を煩せば皆伴々安房へ來り老母
あらも起程の準備をと急ぐ送り示し合ひれバ文五兵衛感佩とこの
後寔公然と肩付た親兵衛と妙真え相伴あら猛のうきく後若狭
某ハ孫を背負て郡堺を送る。や阿懷よ急ぎも慌き物と取送を
と心をつれバ妙真も遂よろ後よ寝て後よ腰よ楚と著す。みくらに衣とゆけむお装と
護身袋とそな腰よ楚と著す。みくらに衣とゆけむお装と
整て貯金をど財布の袋よ身よ著て家廟の位牌古記舊錄孫が
被替の衣をも運へとう集ゆく下祇よ包みう照文ハ水行を便さむと
そとも順風やねば心よ任せだ只共走りよ走らんと。ゆくとれ彼と急行程よ
きの江戸まで船をかへ依頃とく小廝の只一個ゆく妙真が瞭る。

促裝もとをもく。あらじ地へ邁せあふと訝しけよ客を妙真ハ曲よ報じる。
蟻崎アリザキが大八と云云の处を抱くやんと宣す。解たぬとぞうと仕へを
遣ふもあだ行徳の外祖あら途を背負ひなんとくかうもぬをな先
ども心よきよ吾倚も共侶やとらゆ。從者かはりとづばせん今還り事
めとも。遣ふハ心かは似れど些の祇包あらもあらもとゆうじゆと
依頃一残よ及びぞ。そもと易だりあん。舟船と漕ぎりとも足ハ疲うと
かたよ今かへりとく何うあらん何處までも俱へと快く諾ひるはゆの淳朴
き。主のあら勞を厭せ他へ蒿工ホと努めかねばこそ件の祇包を中詰め
負ひ。あく草鞋の紐を締びく文五兵衛ハ大八の親兵衛を背す負ひぬ。
苗守やと彼耳疎れ老婆とのを送せても有難ふ名残ハ惜え笠よ杖よと妻
あり。一ぐ支度やとゆく整うぶ照文と先よ立く食共侶よ背門すう等ふ人よ面を

立てども笠あく傾けく間道すり進む程よ落日暉をとて野禽飛べと急ぐ。
秋よ苗よ夕風ハ昼の秋暑よ似えどあだ急ぐとれど足弱の動もそれば後きを。
待つてハ又見る市川の町を離れて田舎路を上總の入並松原を荔よされば。
處々延繫る茅萱の下よ集く虫の声ちうとうより暮初く日没すなりる。
浩丸よ前面を下叢林に松蔭より顯れゆる一個の癖者頭よよ拭の糸鉢巻
と腰二口の短刀を跨右手よ八尺を長櫂を挾みて柳色深の筒腰被の母糞
煩かず諸肩粗ら單衣の両袖と前よ締く毛膚陽著よ衣の衿を片端
折せし躬剽の打扮髪英ハ皓く面ハ赤涅めく山猿の累よごく骨も太く。
膚ハ黒斑ゆく周兩の崇よ似く大道を陥と立塞うととされば是別命だ。
怒れば船を覆し又屋を倒すと現暴風の名あが船九郎めを有る。
當下暴風船九郎ハ持くる權を取直して横よろ又推立く酒氣芬きる

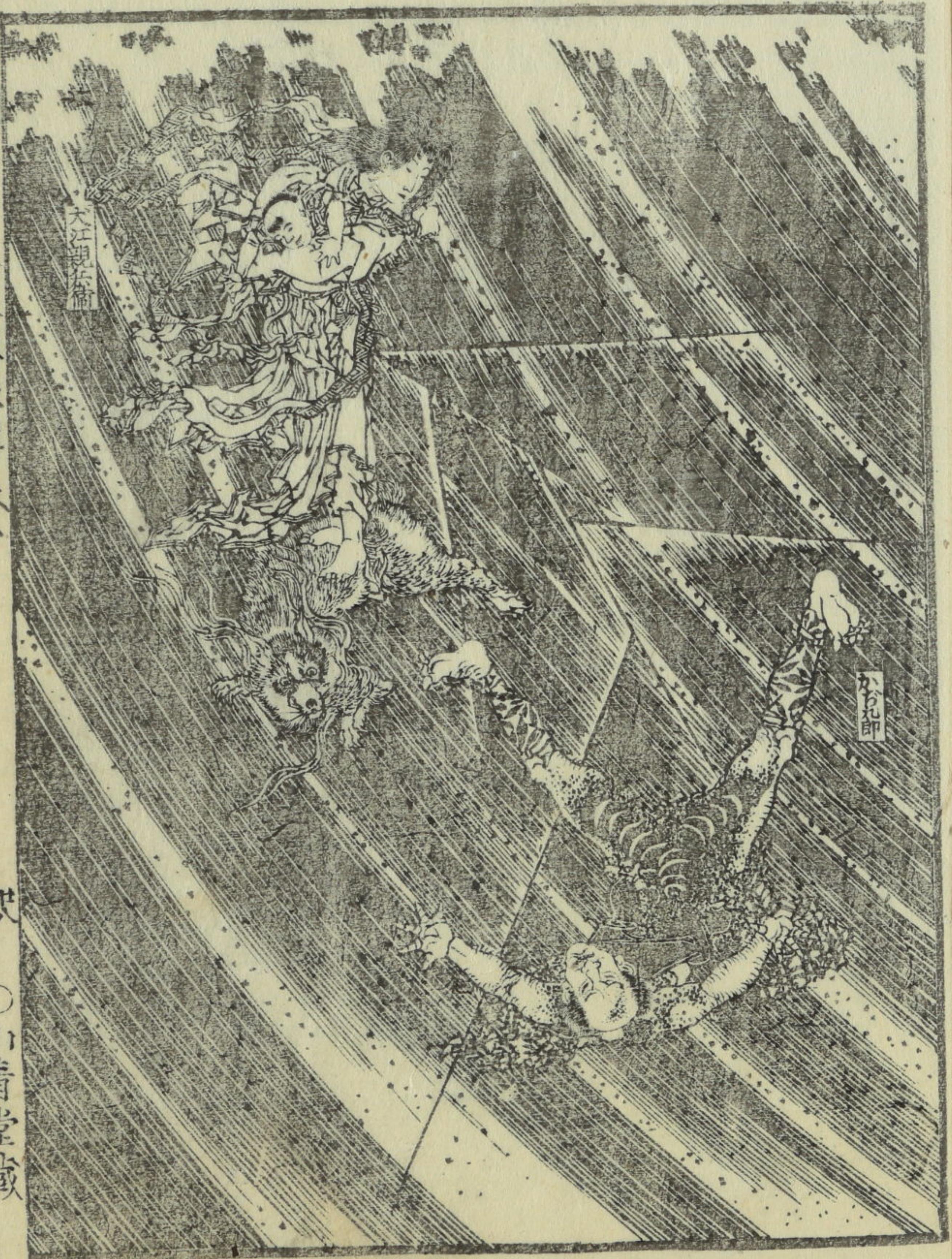
声高き小魚され賊奴輩遙き汝ホ既よ惡々の戲房せられは睨まれ詰
られ。後家共侶よ逐電疾かくあやーと精せぐ夥計の甲乙駆催して門か
狗を附かぬ途かハ視法師を立置て夜行をうち路服をこの海道と覗著
先へ輪く張る綱よ宿栖迷ひの旅鳥捕て絞るゝ際費らば脱れかくと
觀念しき女を遞与してもゑく死の邊をりや追えんやと匈罰す喧呻て疾視
。照文これぞ才人だ先度よ懲ね不敵の忠棍今苗の根を断せハ地方仕
患と何時くハ除ん刀を穢せハ惜れども望み任く先物名をと敦園猛く對ひ
進え刃を晃りと引抜けば船九郎ハ声を立く衆皆呼んでおわぬと
左右から高萱の中小松の蔭あり或ハ三人或ハ五人折櫂大魚刀を引提る
夥の忠黨簇々と冬蟲のどく跳び立て照文ホを攬蓑く數十人と競ひ墓
石バ照文ハ些も擬淺也前後左右よ引附く面もやが戦ちうその間よ



文五兵衛ハ大八の親兵衛を妙真より抱き小兒と婦人へ特よ危し依介を物を奮う
路を市川の入退死更。とく。とく。程もある。後方より下隊の惡黨突然と
頭と手と噉と噉と轍と競ひを文五兵衛ハ倍と多くがそハ脱きよろく。
妙真を背み立と旅刀を打振々と防だ戦ゆる老人かれども素すの町人よ
あふれ。轍ひ刀をもく法よ稱ゆく歎ハ三人。浅瘦を負へども勇勢を憑く
物もせぬ。依介ハ亦文五兵衛が失あんとを怕れ。援んとをも身玉寸鐵を
帶がれば妙真が捨る杖をうち振立て進まう。この時やも照文ハも三人を破
伏せく五人。深瘍を負せしをも敵ハ目よ餘る大勢あれバ後方をくかへる暇も
あらず。又船九郎より近づく。そぞら不推闇られ。進退自在とゆる余程
依介ハ文五兵衛と推並びく且く敵を柱へてとももハ一條の杖の三九郎ハ三方
より打閃を敵の器械を接ゆく眉間を礫と傷られ。痛瘍あれば要時もぬ
堪へ。灑と漬る鮮血をもて苦と叫く。乍り。文五兵衛ハ元もく頗りよ
憐む老入の勇氣も腕も衰へん。禦た難つて壁に座。逡巡して妙真と面遙ふりやう。
透と窺ふ船九郎ハ薄暗だるまゝ走り聲を声をもうげ。妙真を親兵衛共侶
楚と抱は。吐嗟と叫ぶ身を向く。解をく角へども声を絞く。妙真を親兵衛共侶
とすと見方もく隻ひ。釤子技とく船九郎が抱汝腕を骨も徹れと丁と
刺く裏歛をもよあらねども有繫疼痛を堪え。驚た怒く。霎時もぐ。
あを何をうごと身を戦と組む。兩手を解へ。妙真ハ稚兒と肩を搖被逸足脚
逃んとひを脱しも遣ひ。跳蒐りと大八の親兵衛が肩尖を丁と觸て。手と枝の
果を撲とく。推放搔撲と左の脇を捉籠。妙真ハ稚兒を畧奪られ。かくよ
脱き路もく。身のつて親兵衛をそらえ。とそば些もとあさを。嗚むを。釋か
みの怨もあらず。料もか。むだ人よりあるのを逐せ。復せと叫び。泣の引通人と立

関東の俗小
児を罵りそ
鐵鬼とりよ。
との食を求
とのやむ時
かれりありそ

あれ、妨害と踢倒て瞬の間入横の路を一町あまり走る。妙真を
稍身を起してかや追單と慕あらを舵九郎ハえりて朽樹の株よ尻うも
く。肱腋よ抱きて稚児を弄玉のどく投揚く地上へ撃と落せ、息も絶
べく哭叫ぶ声をよそひ薄月夜妙真ハ轉つ轆つ喘々近づく程よ舵九郎ハ
をと。また見
稚児と又すく動せば尼奴且よくこれとよ己があらむ役をハこの餓鬼六
今寂滅為樂又同行の三人ハ夥計の數輩よ任用されバ一人も活てハ久モ
べりて。固へ埋や死人の縁起も彼も此もあらずと今あり一期を憑とゆべ
市川へねり還り。今宵を二世のゆゑ下鬼あらば餓鬼も下ゆハ措を阿乳母
ひき。もち。う。わ.
日傘で饅頭の皮を剥ぐ。榮曜の表盛否と以ハこの細鱗を内膾み
酒をく。あらを決めて心をよ応をとだハこの餓鬼をとむ應の石を搔
く胸前打を振揚れバ妙真ハ吐嗟とぞううよ目も眩までも消く叫を



再び言葉をあぐらかに。金の神仏の感應真助を黙禱して慈悲を忍び心を苦しめ立並びて目成す間四五十歩よ過ぎるを船九郎ハ既に斯悔懲る残忍不敵の與る衆へと早矢轡に又呵々と冷笑ひ拗ひよろひと脣齶でも汝が両手を死ゆ。後家奴も珠数を断ちかんとバ餓鬼奴を料理せん巻の刃をよくよと石をうち揚ひ妙真ハ只身を抗ぐあれと哭叫ぶ声冤悲れ死體絶命照文も文五兵衛も今ハ忍かず忍れど小児を撃ば咎の大刀難言をつぐら遡え乾竹剣はかまんと刀の鞘よりとく走り進んと程程船九郎、會う石を肉より稚兒の胸を望み撃ぐとおもむる拳狂々く地上を破と拍くが且怪と且聴く塵粉よされと復ゆき揚る腕忽地麻羅てこれかあだ悶然と頭の上に竅鱗と一束の靄雲天引降く電光凄く風亦颯と音一石を卷た沙を飛べ草木を靡くも鳴動よ哉、明く或く暗く。

雲ハ漸々降事く大八の親兵衛を引包むとぞとぞをうし。中天へ登れ。船九郎ハされよ復りく驚た瞬の兩手を抗ぐかや稚兒を遣りしと跳狂く撲地と輾べ足ハとまぬあくと身ハ地とまれ雲の中よ物ありく倒ゆ引揚る。鮮血匂と雷りく船九郎ハ脣より鳩尾の邊あぐをくとくと引裂する。船九郎ハ落しけどかる奇特よ照文も文五兵衛も進みくと忙然と後方す。嚮よ逃る悪黨四五人。船九郎をくわびえん船棹稽藻刈鎌かく応じ物を閃くく不意よ起く聲と進むと照文もく見えりく大刀真額よ拔鬚一縱横無礙よ砍立れ巴文五兵衛も相並く再び刀をうち振りて兩人存一両敵を瞬間よ砍仆矣残る奴原舌を掉く刃を引く遡えを三度許す。追捨て舊の處よ立えれば風をまつて雲霧く傾沈む五日の月の影の幽迷りを。

編述
曲亭馬琴今稿本

淨書

千形仲道騰

繡像画工

柳川重信

奇厥

中
村
喜
作
刊
文

家傳神女湯夏

色
ひきぬきのうひて貢へんをもつてよのうのあまがすくもとくわく、
百銅　うむ功のう木のうどくともうまであざべくらくに包くさあるせり
葉をえど家傳の加げんふよきとそそのてのきもれまゐる

婦人之妙藥

五邊一〇大包三百粒代五百文 中包三十粒代五百文 小包十粒代五十文
母ドレ毎月つる虫ふうアめらきふりちひてあくとも秋の下ノス産後みがりの
きりふり方妙あり 一包代六十四文 半包代三十二文

熊膽黑丸子

年のみの正直者をえども製方家極の加げんをつくせりと見えぬふ熊胆
けどりてくよるのをまごむをもとぞその功をまことに一包代五千

製藥并弘所

江戸先籠町中坂下南側四方之店向
灌澤氏

取次所 江戸芝浦

神明前ひづる市三湯○大坂心無橋筋からわ町南へ西内屋太助

里見八犬傳第四輯第五之卷
朝夷巡嶼記第四編
五冊

第四輯の内この巻不足。付五ノ上下
二冊來已正月松の内卷相送。出後付
此責か。やい 第五編來歲嗣出

里見大傳初輯ヨリ第三輯マヂ十五冊
美濃舊衣八丈綺談 全五冊

先年より追々巻 第五輯來歲嗣出
繪入よき本古今未曾有の因果物語
八犬ち心島記のひやうたん記なり

越後雪譜 江戸著作堂老人著

越後塩澤鈴木牧之考訂 近刻

秘笈名方 神田 潤澤興繼宗伯竹

纂輯　多く古今の
奇方を集む　近刻

刊行書肆

神田御成道平永町

山奇

平八

文政三年庚辰
刊行書肆
江
神

新橋加賀町 水谷甚三郎 梓

袖田御成道平永町 山崎 平八

